



全盛期には休日の家族連れで賑わったであろう
名残が残る寂れたショッピングモール。
しかし今では郊外の
田舎と言え、
代名詞で使われる
そんな風になってしまった、
そんな場所。

時刻は正午過ぎ、
現在このショッピングモールには人が一人もいない、
代わりにはこのモールの名物とされていた
大きな噴水を中心とした広場には
下級マージョがうろついていた。

「数は…2、3…5、ですか、一回で済みそうですね」

上空から穏やかな声で獲物の数を確認める女性、

カルミア・オクト

彼女は左腕のアニマウエポン「タウゼント」を上空で構えると、身体の一部が光り出す。

そして腕の内部で確認したマーゴの数と同じ本数のダートを生成し、連続発射する。

発射されたダートは全てのマーゴのコアを正確に打ち抜き、広場にいたマーゴは全て消滅した。

一月前の事、
このショッピングモールに数体のマーゴが住み着いた、
しかし郊外にあったモールの支配人は
ただでさえ客が減っている状態での更なるマイナスイメージを嫌い、
アダマンティウス・リベラティオへの通報をしなかった。

1週目はマーゴも人を襲う事無く陰に隠れ、
害虫や害獣だけを喰っていた事から、
人への被害は全く無かった。

2週目になると支配人が把握している数以上のマーゴが
モール内に住み着き、従業員からの目撃情報が出始めた。

3週目に遂に従業員に犠牲者がでてしまう、
しかし犠牲者は清掃員で
身寄りも無いと分かった支配人は
その事実をもみ消してしまう。

そして4週目、
かなりの数になったマーゴが営業時間中に一斉に動き出し、
従業員と客に多大な犠牲を出した所で初めて
アイシャ達に通報がされ、
アイシャ達が派遣されたのである。

偵察班の情報からマーゴの数は50程度、アイシャ、レント、カルミアといういつものチームであればさほど難しい任務ではない。

だが中級や上級マーゴが紛れていた場合は話が変わる、その可能性も考慮してカルミアは上空から、現地の偵察班は地上から入念に建物を調べた。

結果、数は58、全て下級マーゴであると判明したので、偵察班は後方に下がってもらい、討伐は3人で行われる事になった。

アイシャのチームは基本的にアイシャが先頭に立ち、レントがそれをサポート、それを上空からカルミアが援護するという戦法を取るのだが、今回はモールの両端からアイシャとレントが攻め込み、マーゴを討伐していく。

追い立てられたマーゴは逃げようとするが殆どの出入り口は偵察班の仕事で塞がれており、逃げられる場所は広場に限定されている。そしてそこに逃げて来たマーゴがある程度溜まったらカルミアが始末する、そういう作戦だった。

「カルミア、こっちは全部終わった、そっちは?。」

広場にマーゴが現れないなと思ってしていると、カルミアの耳にチームリーダーだー且つ彼女の最愛の人、アイシャの声が耳に響く。

「はい♪、広場に来た分に関しては1体も逃がしていません、後はレンちゃんとの連絡待ちです。」

返事の最初に声が若干上ずったが、構わず報告を続ける。

カルミア曰く、任務の時の真剣なアイシャの声はともかっこいい。特にカルミアが好きなのは、気の許した人間にだけ向けられる真剣さとフランクさが合わさったこの声音なのである。これを聞いて彼女はときめかずにはいられないのだ。

「ルミアさん、こつちも全部終わりましたよ!。」

丁度良くアイシャの弟子にしてカルミアの友人、
レントからの連絡が入る。

「あたしは28体仕留めた、レンは?」

アイシャが倒したマーゴの数を報告する、
こういった多くの下級マーゴを討伐する任務の際には各人
仕留めたマーゴの数を数えておく、

「私は16体です、ルミアさんは?。」

続いてレントが報告する、
これで偵察で確認した数と仕留めたマーゴの数が合えば
問題は無いのだが。

「私は13体ですね……あ……」

こうして数が合わない場合は面倒な事になる、
マーゴは下級でも擬態が得意だったり
狭い部分に入り込めたりと
逃げる事が得意な種もいる。
見逃せば更に被害者が増える可能性もあるし、
逃げ続けた結果
中級、上級にクラスアップされては問題なのだ。

「よし、レンとあたしはもう1回入口からやり直し、カルミアは上空監視を続けて。」

「はい！」

とレントから元気のいい返事が聞こえるがカルミアからは何の返答もない。

「カルミア？」

アイシャがカルミアにもう一度問いかけ何かあったのかと近くの出入り口から外に出ると、同時のタイミングで広場にあったゴミ箱にダートが突き刺さる、

中から断末魔の悲鳴を聞こえ、窮屈な場所だった為かマーゴはゴミ箱から全身を出す事が出来ないまま消滅していった。

「これで14体ですね」

笑顔で上空から言うカルミアに、

「そうだね、じゃあ最終確認しようか。」

アイシャが笑顔で答えるのだった。

「よし！確認終了、皆お疲れ様ー！、またよろしくねー！」

下がらせていた偵察班も交えモール内をくまなく探索し、マールゴの討伐が確認された所でアイシヤが全員に任務の終了を告げる。

その後偵察班は

自分達のチームの車両にまとまって帰るが、

アイシヤのチームはそれとは別の自分達の車がありそれで帰るので、実質現地解散となる。

「2人もお疲れ様。」

そう言うアイシヤに笑顔で「お疲れさまでした。」と返す2人。

「大分時間も早いですね、
ところで今日のお夕飯何にしますか？」

とカルミアが切り出す。
アイシヤの家の晩御飯は必ずカルミアが作る、レントが弟子入りしてから3人での食卓が当たり前の光景である。
なのでいつものようにカルミアは2人に希望の献立を訪ねる。

「うーん、なんか魚が食べたいかなあ？」

「えっ？先輩、どうしたんですか？、
とうとう胃がおばあちゃんに……？」

とアイシャが答えるとレントが心配そうに尋ねる。

「グー？パー？♡。」

アイシャは笑顔に怒りを纏わせながら、
どっちで殴られたい？
と拳を開いたり閉じたりする。

「いやだって昨日も赤身っていいよねと言ってたし、
とうとう油がキツくエリアに突入したのが……。」

「んなわけあるか、
なんか今週肉が多い気がしたから違うものが食べたい気分なのよ。」

「じゃあ今日はお魚にしましょうか、
なにがメニューのリクエストはありますか？」

「じゃあ煮付がいい、久しぶりにカルミアが作る煮付が食べたい。」

「そういえば最近作ってませんでしたね、
じゃあ煮付けにしましょうか、レンちゃんもそれでいいかしらっ。」

「はい！私ルミアさんの作る煮る系好きですー
ご飯は多めに炊いてくださいー。」

「ふふ、沢山食べて下さいね。」

「じゃあ帰りの道すがら買い物して帰るうか。」

本日の夕飯の献立が決まった所で
アイシヤが任務用の車のロックを
解除する、乗り込もうとする3人だが
突然通信が入る。

「なんだろ？」

とアイシヤが通信を全員で聞けるようにする。

内容は他のマーゴハンターからの救援要請だった、
場所的にはアイシヤ達のいる地点が一番近いという事で
連絡があったのだが、
マップで現場位置を確認すると道が入り組んでおり
車で1時間以上する場所だった。

「私が行きましょう。」

とカルミアが提案する、

「飛んで行く分にはそんなに時間もかからないでしょうし、
内容を聞く限り援護だけで十分な雰囲気ですから。」

「うん、そうだね、
それであたし達は？遅れてでも一緒に向かう？」

「いえ、それには及びません、2人は先に帰っていて下さい。」

「分かった。」

カルミアもアイシャ同様クラス5のマーゴハンターなので、彼女の強さと判断力を信頼しているのでアイシャはカルミアの選択を迷いなく了承する。

「じゃあ私達で晩御飯のお買い物しておきますよ。」

とレントが提案し、

「そうだね、そうしようか。カルミア、もう何買うかは決めてる？」

アイシャも賛同する。

「はい、では買う物は現地に向かいながら連絡しますので
お願いします。」

「了解、じゃあ気を付けてね。」

「はい、いつてきます。」

そう言って戦闘形態になったカルミアは飛び立っていった。

（案外あっさり終わりましたね、簡単で良かったです。）

現場に到着すると、連絡にあった大変な状況は乗り越えていた。だが下級マーゴが現場周辺に散ってしまった為、カルミアは掃討作戦を手伝う事になった。

彼女が上空から指示を出し、時には狙撃をしたりと仕事の内容自体は簡単なものだった――。

無事に任務は完了したが、思ったより時間を食ってしまい、今から急いでもアイシャ達に追いつけそうになかった。カルミアはのんびりと空中散歩を楽しむ事にした。

(……?、なんででしょうか?)

飛行し続けていたカルミアだが、何か違和感を感じた。

真っすぐ飛んでいた時はいつも通りなのだが、急に高度を変えたり回転したりした時に何かにぶつかったような感覚を覚えるのだ。

その感覚は本当に微妙なものだったが体の半分以上が生体機械となっているカルミアだからこそ感じる違和感だった。

カルミアは一旦飛行を辞め空中で停止する、そして左目の義眼の索敵、解析モードを起動し周囲を見回す。

(何も……無い?)

カルミアの解析と索敵能力はかなりの性能を誇るのだがその目には何も映らなかった。

少し考え、飛行を再開しようとしたがやはり思い止まる。

「…何が、嫌な感じがしますね…。」

クラス5のマーゴハンターとしてこれまで培ってきた勘が警鐘を鳴らしている。

彼女の義眼が再び光りだす、今度は簡単な索敵ではなく、赤外線や放射線、電波等の仮にこの場に何かかいて、それにステルス機能があると想定した索敵を開始する。

「ダメですね……。」

だがその義眼には何も映らなかった。

（でも何でしようこの嫌な感じ……。）

どうしても嫌な予感が拭えない、
カルミアは最後なんとなくにこれまでのデータを脳内で
まとめ、それを空気の流れのデータに照らし合わせてみる事にした。

「!?…これは!？」

カルミアの目に映ったのは空気の流れがぐちゃぐちゃに歪んだ光景だった、それはまるで蛇のようなものが空中を這い回った後の様な極めて不自然なものだった。

「何!?!…いや、これは。」

カルミアの索敵でも発見できず、こんな訳の分からない方法でようやく痕跡だけ発見できるような、そんな能力を持った生物など、この世界に1種しかない。

「いますね、マーゴが。」

当然の結論にたどり着いたカルミアが周囲を警戒する、その時、何もない虚空から。

「ほう、我に気づくのか……」

その声は普通は聞き取れない程のか細いものだったが、警戒態勢に入ったカルミアの耳には聞き取ることが出来た。

もう確定となったマーゴの存在に臨戦態勢に入ろうとしたカルミアだったが――。

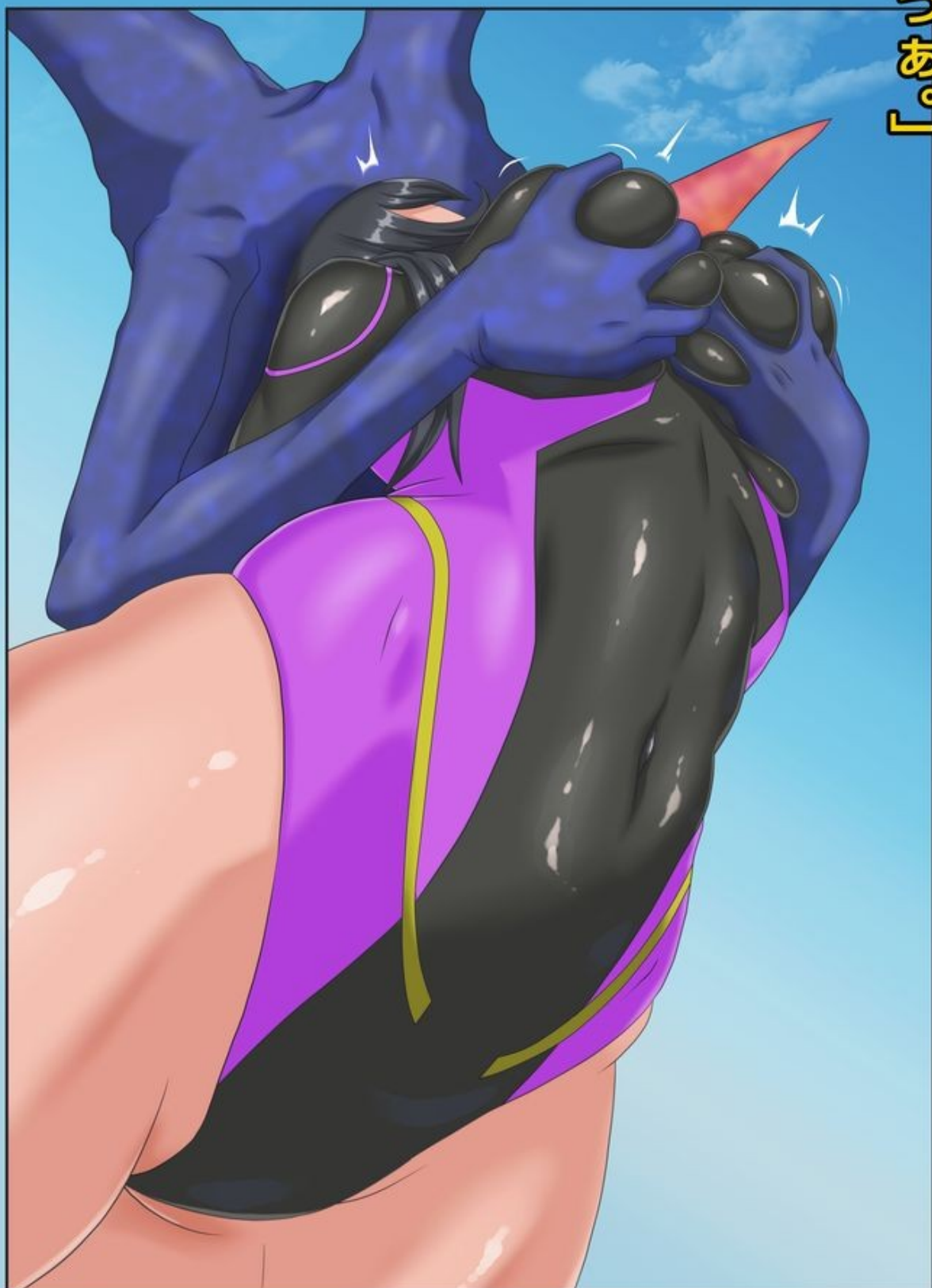




「べっっっー!! あああああっ!!」

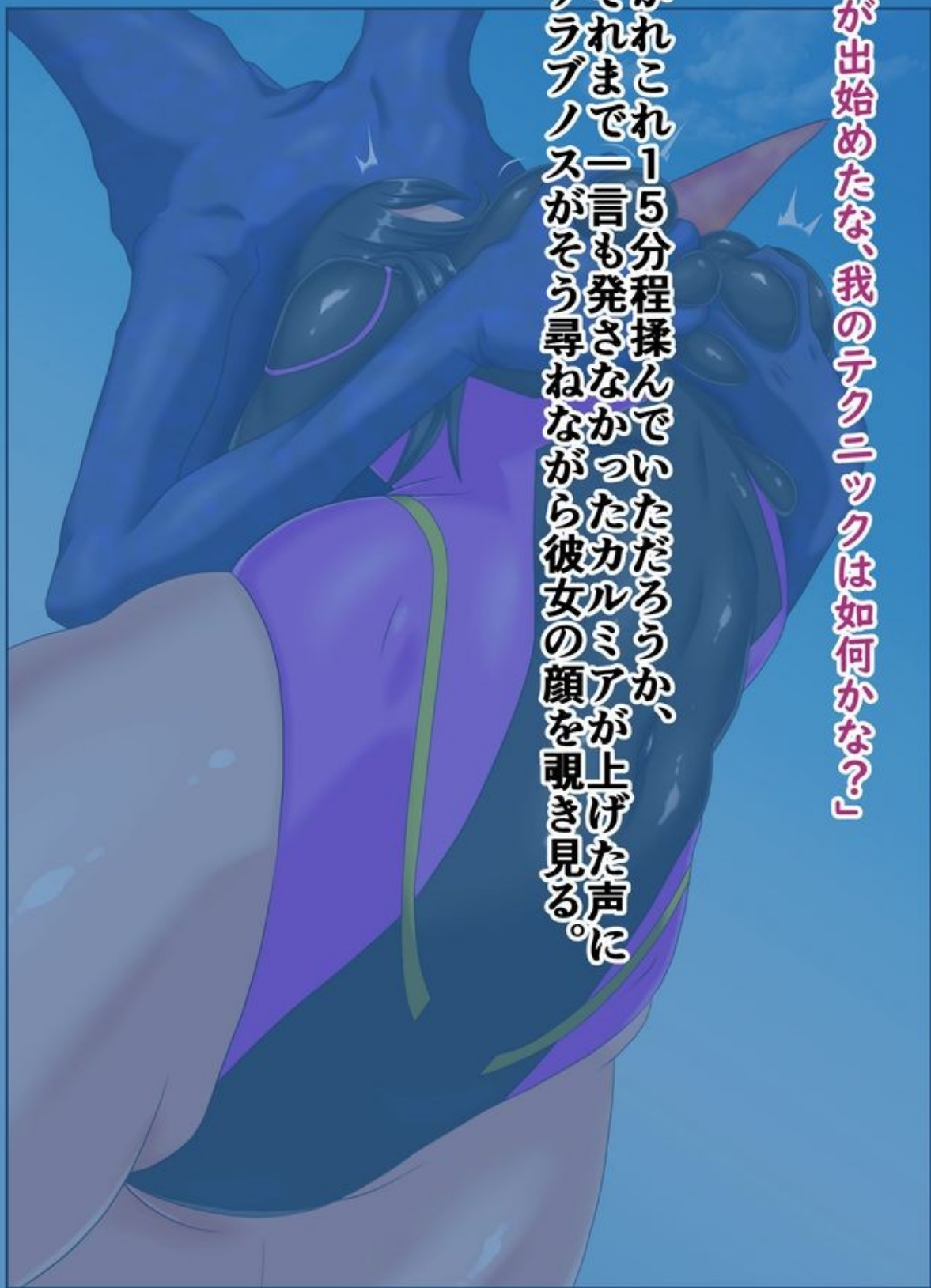


「んっっっんっ」



「ようやく声が出始めたな、私のテクニクは如何かな？」

かれこれ15分程揉んでいただろうか、
それまで一言も発さなかったカルミアが上げた声に
ケラブノスがそう尋ねながら彼女の顔を覗き見る。



「……………はあ……。」

カルミアは溜息を一つくと、

「声？、あれだけ強く揉まれたら痛くて声も出ますよ、まさか感じてるとか思いましたか？」

「あなたは女の胸の揉み方も
知らないんですか？」



「下手すぎて可愛そうなので、
今日は見逃してあげましょうか？」

「ううむ、やはりこのような付け焼刃の方法では駄目であつたか……。」

そう反省するような、
何かを模索するような自問をしたケラブノスは。

「失礼した、やはり熟達者の技を
すぐに使えると思つた我が愚かだった。」

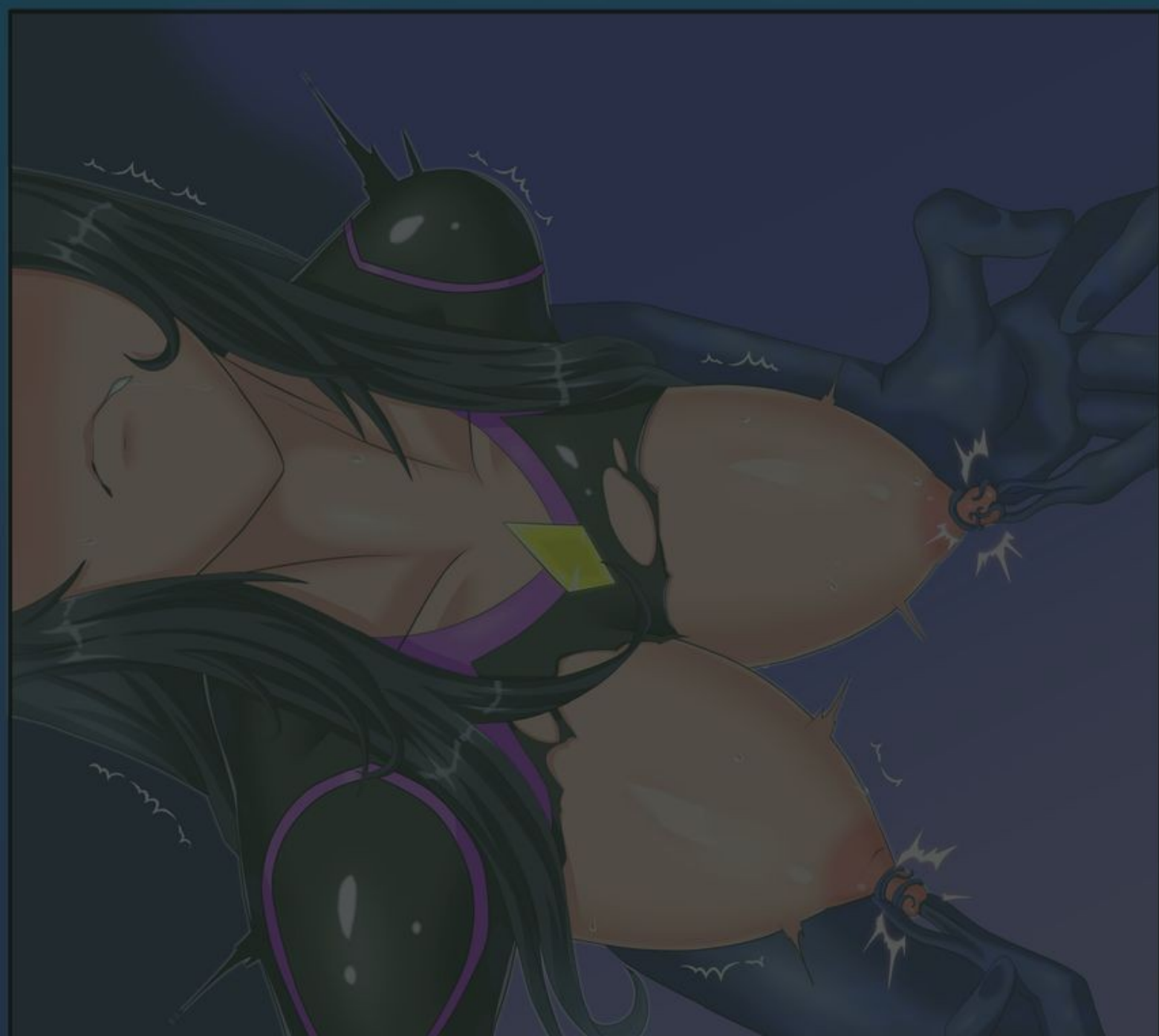
「んい！？……うううううう！！！！」



「その反抗的な態度も
この乳首を思えば可愛いものではないか。」

「んっく…っる、ち、
ああっ♡♡♡!
くっ♡♡♡っ♡♡♡」。





「はあ、はあ……ん、はあ……。」





カルミアを無力化し捕らえたケラブノス。最初は数週間前に出会った乳揉みに只ならぬ拘りを持つマーズに伝授された乳揉み技を実行したのだが、残念ながらカルミアには通じず冷たく蔑まれるた。

そのことにちよつとだけ今までにない感覚を覚えたのだが、

きつと彼女の殺気に圧されただけだろうと、

本来ケラブノスが得意とする、

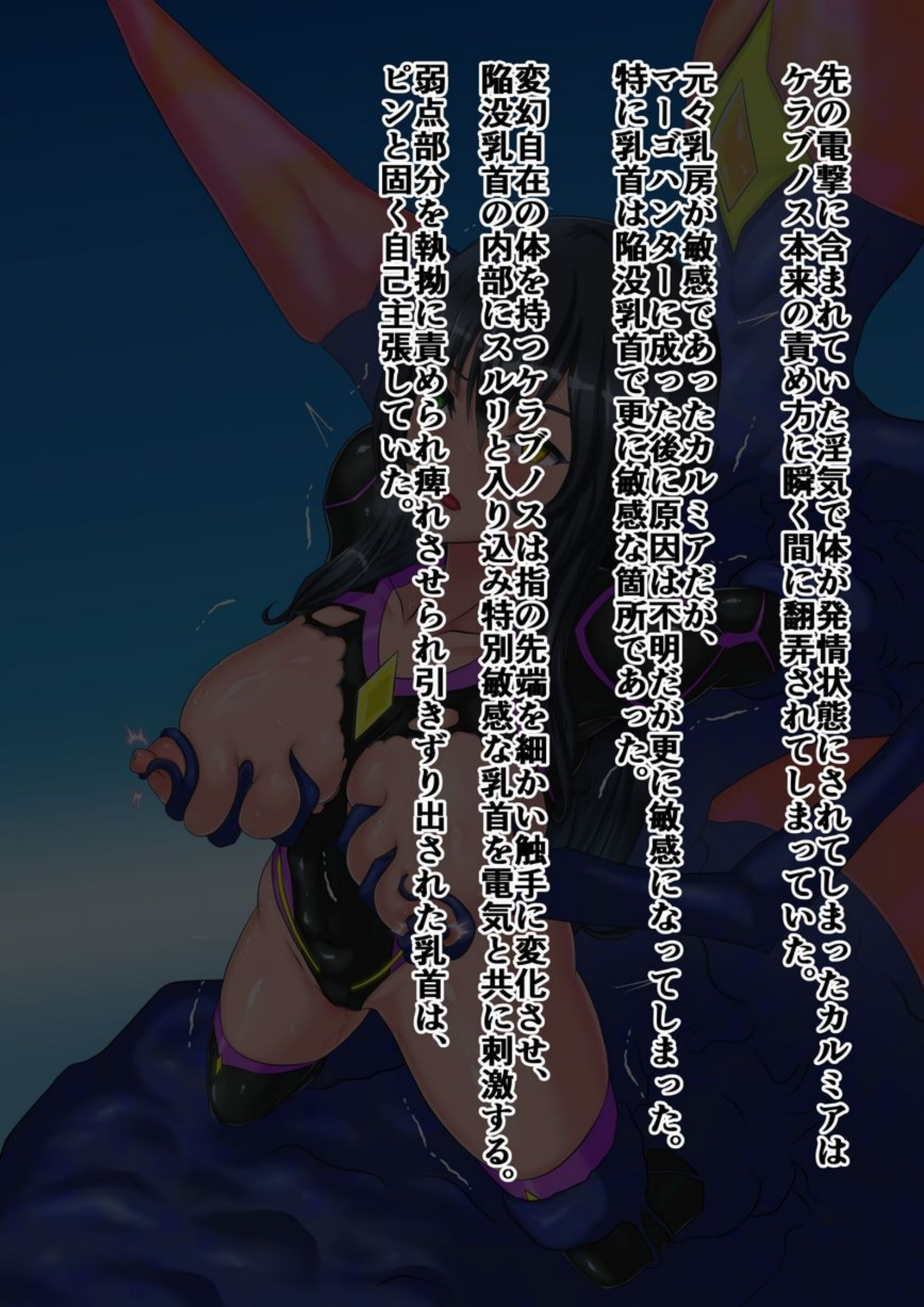
強力な淫気を含む電気を自在に操る力で相手の体に電流を巡らせ、感覚を狂わせる責め方に切り替えた。

先の電撃に含まれていた淫気で体が発情状態にされてしまったカルミアはケラブノス本来の責め方に瞬く間に翻弄されてしまっていた。

元々乳房が敏感であったカルミアだが、マーゴハンターに成った後に原因は不明だが更に敏感になってしまった。特に乳首は陥没乳首で更に敏感な箇所であった。

変幻自在の体を持つケラブノスは指の先端を細かい触手に変化させ、陥没乳首の内部にスルリと入り込み特別敏感な乳首を電気と共に刺激する。

弱点部分を執拗に責められ痺れさせられ引きずり出された乳首は、ピンと固く自己主張していた。



「あふあん！んぐう……うううー！」

カルミアの性器と口に触手が挿入される、
弱らせたと判断したケラブノスがエナジードレインを開始したのだ、
上下の口への抽挿と共にカルミアのエネルギが奪われる……
と思われたが。



「???、これは、どういう事だ?」

何度もエネルギーを吸いだそうとしても、
カルミアの身体からエネルギーを吸えない。
一番吸収率の良い粘膜部分からにも関わらずだ。

エナジードレインの吸収量は
相手を快感でどれだけ蕩けさせたかで決まる、
ただ猿の様に激しく性行為をした所で
快感より苦痛が多ければエネルギーの量も
質も格段に低下してしまう。

下級マーゴではこの辺りが分からず、
より多くのエネルギーを動物的に求め過ぎた結果
相手を殺してしまう事もある。

しかしケラブノスは上級マーゴであり、その加減や手管は熟知している、
ハズだったのだが――。

「…けほっ、えふっ…は…はあ…。」

「これはどういふことかね？
快感を覚えているはずだが、君にはエネルギーが無いのか？」

「……………」

触手を引き抜き問いかけるケラブノス、
だがカルミアはそれに対して無言で、
答えるつもりはないようだった。



「……うむ……」

今日は何故か成す事全て上手くいかない、
たまたま良さげなマーゴハンターを見つけた時には
最良の日だと思った数時間前が懐かしい……
と少々凹み気味なケラブノスだったがい……

「まあ仕方がない。」

嘆息をもらすケラブノスの手が再び放電し始める。

「んうあっ！……な、に……!?!」

カルミアの胸に流される電気が胸の内側を探りつつ
全体をマッサージするかの様なものに変化する。

「私の電気はな、
体の構造などを探索する事が出来る、
どうやら君の胸は常人とは違うようだな?。」

「ぶぐう……あ……そんな、こと……あう……!?!」



「中々面白い特徴だな、こっつると溜まってくるのだろう？」

「んくあ♡…う、だ、め…これ…以上…は…んううあっ♡…！」

電気の効果があるとはいえ今まで以上にゆっくりとした乳揉み、
だが一揉みされる度にこれまでに以上に余裕の無い表情になるカルミア。

「ククク、そろそろ限界だろう？我慢は良くないぞ？」

そう言いながらトドメとばかりにケラブノスは揉み込みと電気を強める。
駆け巡る快感がカルミアの全身に波及し、
歯を食いしばり何かに耐えようとするカルミアだったが、

それも限界を迎え――。

「あくっ……うあ♡……く、う……」

カルミアの乳首から勢いよく母乳が噴き出す

「くあ……だめ……やめっ!♡……くう!♡」

「成程、君は母乳が吹き出す時に絶頂を迎えるのか。」

「あう、あ、♡ち……がう……んいくうう!♡♡」

強く揉み込む度に母乳が噴き出し、
その度にカルミアはびくびくと全身を震わせ、
同時に股間からは潮を噴き出す。

彼女の否定とは裏腹にケラブノスが言った通り、
カルミアの身体は母乳が噴き出す度に
絶頂を迎えているようだった。



「さー、さー、さー」

「さー、さー、さー」

「ケラブノス先生、お疲れさまです。」

ケラブノスが訪れたのは、中級以下のマーゴが住みやすい場所に集まり、そこが自然と集落になった「ラース」と呼ばれる場所である、

ケラブノスは出来たばかりの小さいラースを回り、そこでの食糧の提供やラース内でのマーゴのまとめ方等を伝授し、ある程度ラースが大きくなるとまた別のラースに渡っていく事を生業にしていた。

ケラブノスを出迎えたのは中肉中背で紫色の体表のマーゴと、少し痩せ型茶色の体表を持つマーゴだった。

「出迎え感謝する、

前にも言ったと思うが我は今日でここを発つ。」

「はい、伺っております、出来れば先生にはもつとここにいて頂きたかったのですが……。」

「ちよっ、すえんせー、ちよーそうんけーしてえるんで、まだ、いろいろいるうおおすいえてほすういーすっよ。」

「はっはっは、君は相変わらず何を言っているか分からんな、」

茶色のマーゴは都市部の若者を取り込んだ際によく分からない言語を身につけたらしいがケラブノスへの尊敬はあるようで、彼も悪くは思っていないようだった。

「このレースも君たちの様な者が生まれれば軌道に乗る、後はどのように統治していくのか、という事だけだ。」

「はい、先生に教えて頂いたこと、忘れませんが、どこまで出来るかは分かりませんが全力で挑んでいきたいと思えます。」

紫色のマーゴは深くお辞儀をしながら感謝の意を示す。彼が取り込んだ人間がビジネスマンだった影響からの生真面目な性格が伺えた。

「うむ、では最後の贈り物だ。」



「これは！？、もしかして？。」

「ああ、マーゴハンターだ、中々味わえる代物ではないぞ。」

「おお、……ですがその……
そのマーゴハンターが意識を取り戻した時には
どのように対処すればよいでしょうか？、まだ我々の力では抑え込むのは……。」

「心配するな、今回は入念に頭の中を弄っておいた、
二度と元には戻らん、一生快樂に従順なメスとして
ここの重要な栄養源として繁栄の助けになってくれるはずだ。」

「しゃっすがせんせいー！、ちょーすげーっす！ マジスゲーっすー！！。」

「静かにしろ、

しかし流石は先生、最後にこんな素晴らしいものを提供してくれるとは……。」

「味は我が保証する、かなり美味であつたぞ。」

歓喜にはしゃぐ茶色を窺めた紫色だが、彼の顔にも歓喜の笑みが浮かんでいる、この後の事を考えての笑みなのは明白だった。

「そうですか！、ぐひひ。ひひっ。」



ケラブノス

固い外殻と不定形で
自在に形を変えられる体を持つ上級マーゴ。

額の十字の角を中心とした人型の形状の
部分が本体である。

淫気を含んだ強力な電気を操る能力があり、
技の種類の多さはかなりのものになる。

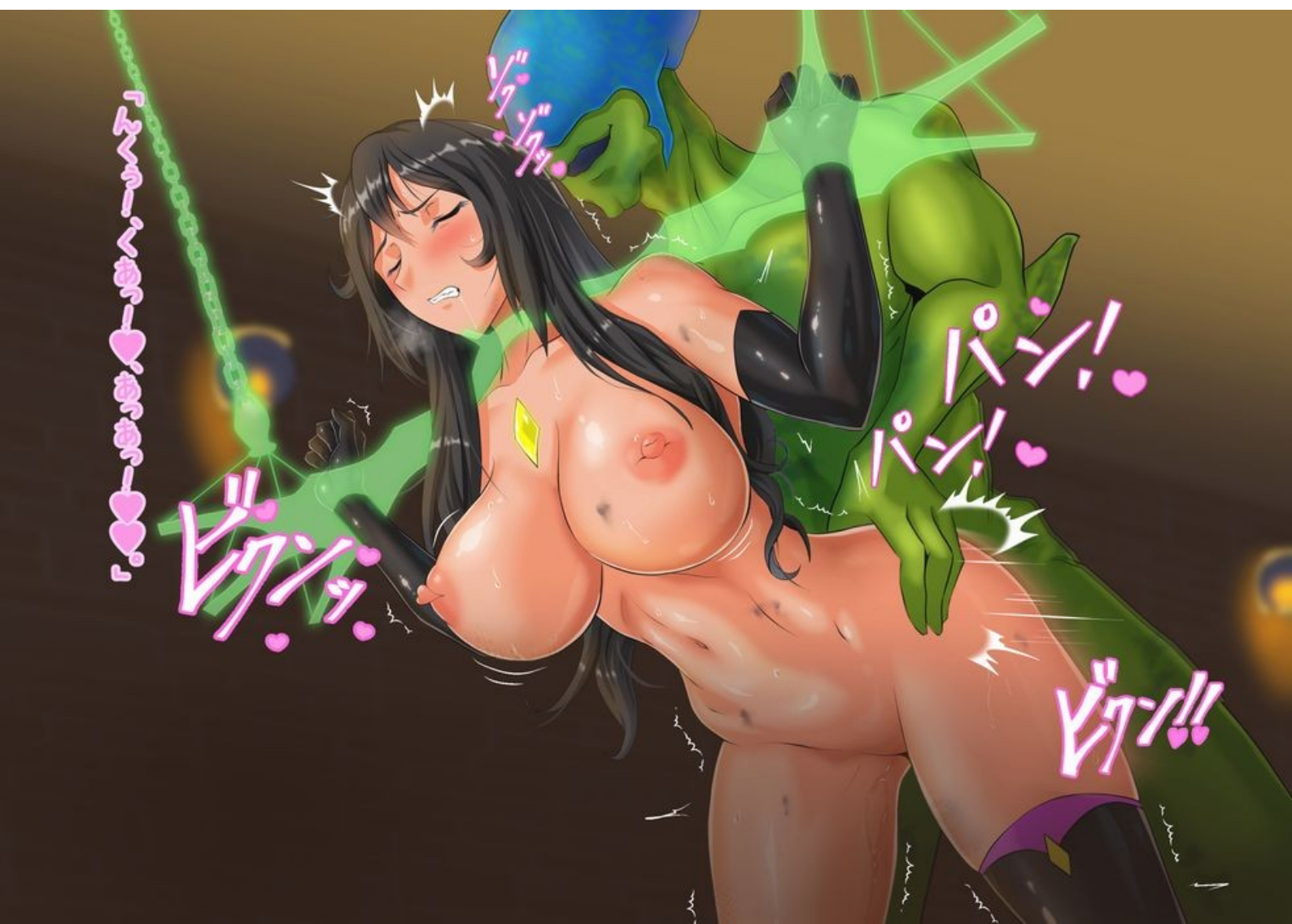
普段はその能力を使って
自身の姿を消し隠している、
そのステルスは
電気能力によるものだが、
原理は不明。

身体の不定形部分は
小型の個体に分離可能で、
その小型分離体はケラブノスの持つ
電気やステルス能力が
ほぼ完全に反映されている。

因みにこの分離体の
能力を減らしたものを
レギオンクラウンという組織に
提供している。

「ラース」と呼ばれる、
下級マーゴ等が寄り集まって出来た集落、
特に出来立ての弱小ラースに好んで手を貸し、
ある程度大きくなるまで面倒を見、
中規模になったと判断するとまた別のラースを探しに旅立つ、
という事を生業にしている。





「……………うんは…。」

カルミアが目覚めるとそこは見覚えのない場所。

照明はあるが薄暗く、広めの部屋である。なんとなく把握できるが周りには何もなくて非常に殺風景な部屋だった。

カルミアは自分の記憶を探る、

確かマーゴに捕らえられ、凌辱を受けた所までは覚えていた、だがそこから記憶が何故か無い、

おそらくあのマーゴに何かされた事は分かる、何故なら、

今自分は拘束具に捕らわれているのだからだ。

「んっ…ふっ…!。やはり、駄目ですね。」

気が付いてから1時間程か、時間の感覚が曖昧なので
正しいかは定かではないがカルミアは拘束具を解除出来ないか
何度も試していた。

だが拘束具は何かの効果が付与されているらしく、
手足に力が入らないどころか
回復しているエネルギーすらまともに使えない状態だった。

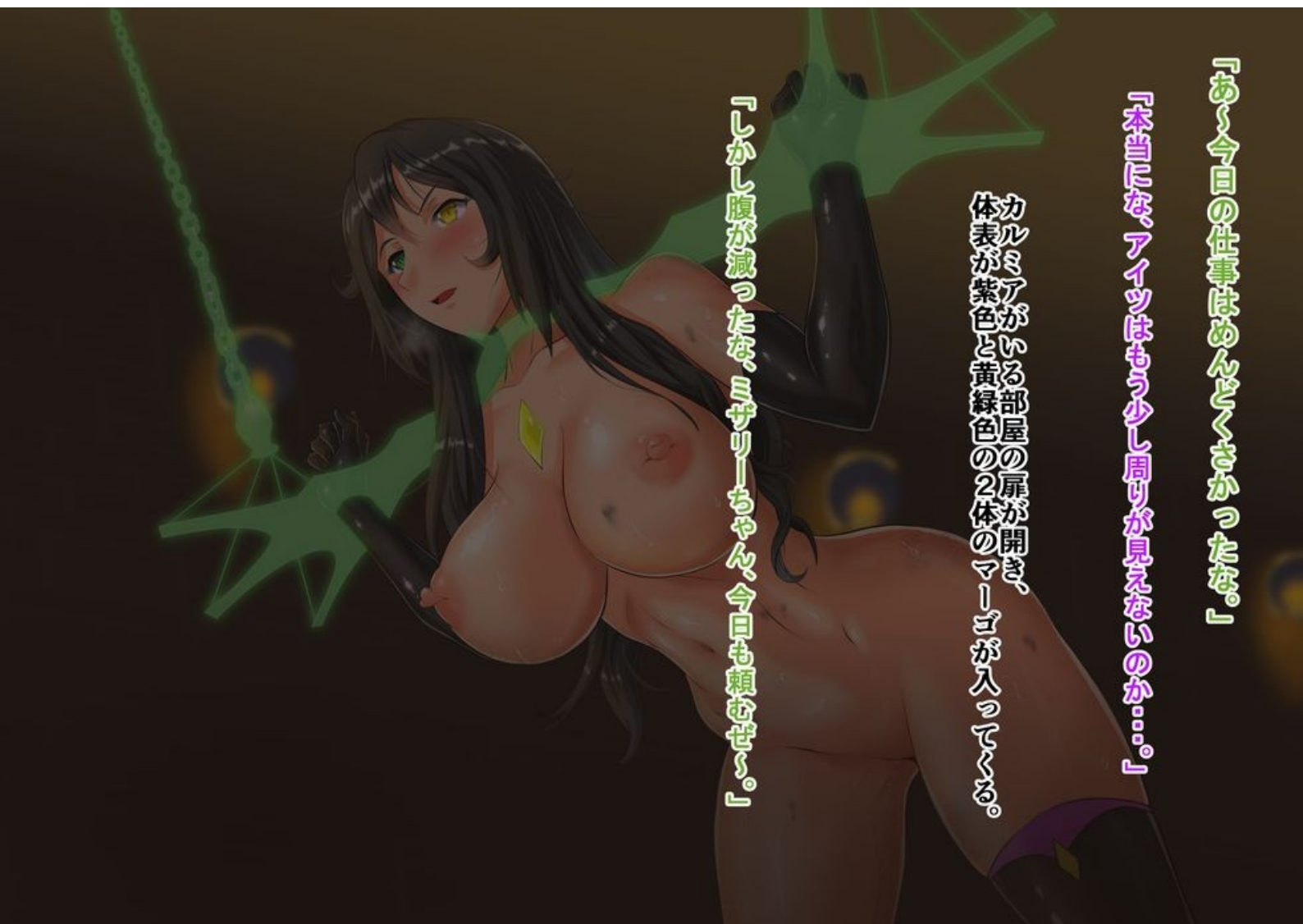


「あゝ今日の仕事はめんどくさかったな。」

「本当にな、アイツはもう少し周りが見えないのか…。」

カルミアがいる部屋の扉が開き、
体表が紫色と黄緑色の2体のマーゴが入ってくる。

「しかし腹が減ったな、ミザリーちゃん、今日も頼むぜ。」



(?…成程、そういう事ですか。)

マーゴが自分の事を違う名前で呼んだ事でカルミアは大体の状況が予測できた。

自分はあのマーゴに頭を弄られたのだろう。

マーゴの中にはそういった脳に直接干渉する能力を持つものもいる、

カルミアはそういった攻撃に対して

対抗する手段を持っていたがあのマーゴの能力はそれを回ったという事だろう、

だがマーゴハンターの回復力は凄まじく、脳を弄られたとしても数日で完全に元通りになる、

だがその数日の記憶は無いに等しい状態になる為、正気に戻った際に自分の状況を把握する為のキーワードの様なモノを各人幾つか用意している。

記憶が無い期間にミザリーという偽名を使っていたという事は少なくとも自分はマーゴハンターや自分に関わる事に関しての情報を敵に渡してはいないという証明であり捕らわれ、監禁されている状況だが、その事だけカルミアは少し安堵するのだった。

「すみませんが、どち様でしゅーっ。」

「んあ？おいおい、昨日もあんなに楽しんだじゃねえ……おい、お前！？」

緑のマーゴはその返答に何かに気付いたようでカルミアから距離を取る。

「おい、ヨイツ記憶が……どうするっ。」
「そのようだな……。」

2体の間に先程までなかった緊張感が走る。

「だがその拘束具は特性だ、力を使えまい、しかしヨイツは念入りに弄られたと聞いたが……。」



「ああ、ご存じないのですね、マーゴハンターに洗脳等は無意味ですよ、たとえ脳が破壊されても数日あれば再生しますからね。」

「化け物だな...。」

「あなた達にだけは言われたくありません。」

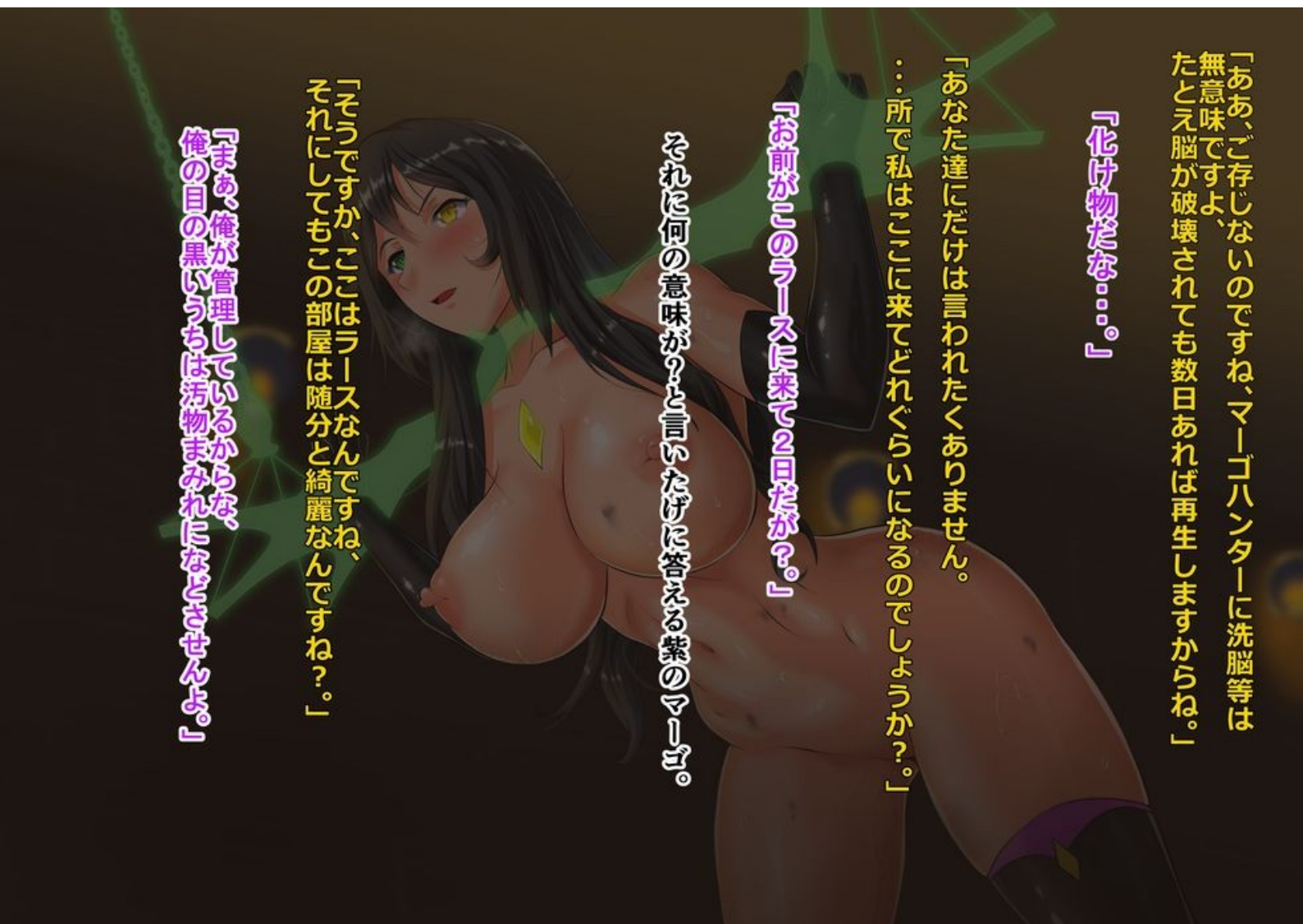
「...所で私はここに来てどれくらいになるのでしょうか?。」

「お前がこのラースに来て2日だが?。」

それに何の意味が?と言いたげに答える紫のマーゴ。

「そうですか、ここはラースなんですね、それにしてもこの部屋は随分と綺麗なんですね?。」

「まあ、俺が管理しているからな、俺の目の黒いうちは汚物まみれになどさせんよ。」



(「さっちゃんのマーゴ」は話せそうすね。)

カルミアとしては今は出来るだけ情報が欲しい、この紫のマーゴは話が出来るような印象を受けたので勘ではあつたが、とりあえず目についたものを少し褒めてみたのだが、それだけで随分と饒舌になってくれた。

うまくやれば色々情報を喋ってくれそうだとカルミアが次の会話を進めようとする。

「おいおい、俺はもう腹が減りすぎて限界だぜ、昨日みたいにしようぜ、あれ良かったからよ。」

だがその会話は黄緑のマーゴに遮られる。

「昨日？、なんでしよう、覚えてないんですが？」

この黄緑のマーゴはどうにも行動に落ち着きが無く、常に体のどこかを動かしている。とても会話が成立する雰囲気では無いと判断していたので、カルミアとしては紫のマーゴとの会話を再開したいのだ。

「おいおい、つれねえじゃねえか。」

「ふぁあっ♡♡♡あへ♡♡♡あふぁん♡♡♡!」

「その拘束具はな、マージョハンターの力を抑えるだけでなく刺激に対してエネルギーを放出しやすくする効果があるんだ。」

食休み中の紫のマージョがカルミアを捕らえる拘束具の事を自慢気に説明した。

「しかも数日間与えられた快楽を固定する能力も付与されているそうだが、昨日まで散々遊ばれてたからな、どうだ？快感に逆らえまい。」

「更に、今日お前用に調達したマージョハンターをエネルギータンクとして使う為のデバイスが到着する。

くくく、記憶が戻ったのは不運だったかも知ない、壊れたままの方が絶望せずにするだろうに……。」

「ズク……の……」

「ググググ」

「グググ」

絶望的状况にいよいよ壊れたと思つた紫のマーゴだったが、
カルミアの笑みは絶望した者のそれではなく、

「どういふ事だ……」

と問い詰めようしたその時――





轟音と共に壁が吹き飛び大穴が開く、
空の明るさが薄暗い部屋の闇を払う、
その大穴を開けた土埃の中に人影の様な
ものが揺らめき。

「……てめえ……、だりゅぐつぽあつ……」。

「遅い。」

緑のマーゴは外敵の侵入だと思い至ったが、土埃から飛び出した赤い閃光、アイシヤに上半身を丸ごと粉碎され消滅していった。



「あんたさあ、嘘が顔に出すぎ、バレバレだよ。」



紫のマーゴが声のする方向、
上を向くと赤く輝くオーラを纏ったアイシヤの姿があった。
左足を高く上げた踵墜としの体勢、
その左足からはエネルギーが溢れ、剣の様な形を形成する。

スカーレットブレイザー

アイシヤの得意とする技の一つで、
上空から足に凝縮したエネルギーを高速で叩きつける技である。
エネルギーが剣の形を成すのは
アイシヤの左足にあるアニマウエポンの力が
影響を及ぼしている為である。

「あーむ。」



「あいつはあたしのだから。」



「ほあ?。」

アイシヤがぼそと呟いた言葉が聞き取れず
思わず聞き返すも間抜けな声しか出ず
言直す事も出来ないまま
灼熱の剣が紫のマーゴを消滅させたのだった。

「カルミア、生きてるかー？」

カルミアの拘束具に他の囚人が仕掛けられてないかチェックしながら、仲間の無事をいつもの常套句で確認するアイシヤ。

「私は迷子の子供ですか。」

「似たようなもんでしょ、

…まったく…心配したんだぞ。」

「あ…はい、ごめんなさい。」

迷子扱いに不満を漏らしてみるカルミア、

それに対していつものように振舞っているが、アイシヤの声に感じられる緊張感にどれだけ心配させたかが容易に想像できてしまったカルミアは素直に謝る。

「うん、生きてるなら…いいよ。」

疲労の色は濃いのがカルミアが無事であることに安堵するアイシヤ。

同じくして拘束具は破壊されカルミアは自由になる。

「おっと。」

拘束具から解放されるカルミアだが手足に力が入らず、そのまま倒れそうになるが、それをアイシヤが受け止める。

「あ、ありがとうございます…」

あつ！、……あの…アイシヤ？、
ちよつと今は近づかない…方が…。」

「?。」

アイシヤに抱えられたなら、
いつもなら喜びそうなカルミアだが、
何故かその態度がいつもと大分違う。

「……あの…その、2日程、お風呂とか…その…。」

「…ああ。」

不思議に思ったアイシヤだったが
すぐにカルミアの言わんとする事を理解する。

カルミアが捕らえられて2日間、記憶は無いとはいえマ1ゴの凌辱に晒され続けた。

おそろく体を洗われたりしてない、
たった2日だが体中マ1ゴの体液にまみれ
それが乾いたらまた体液にまみれるという
のを繰り返し返された
体は相応の匂いになっている、

虜囚の身だったとはいえ
その状態で最愛の人に近づいて欲しくない
と思うのは無理からぬ事だろう。

「ばか、そんなの気にするか
::まあでも::」

アイシヤはそう言いながら
カルミアの身体を抱きしめる、
するとアイシヤの身体が光り、
カルミアにも伝播する。

「カルミアの乙女心に配慮してみた。」

アイシヤはカルミアの表面を熱で覆い、
汚れや匂いなどを消滅させたのだ。

「すぐにお風呂入りたい気分だろうけど
今はこれで我慢してね。」

「ふふ、ありがとうございます。」

いつもながらの心地好い熱に
カルミアは十分満足していたが、
アイシヤが優しくしてくれていたが、
なんとなく少し甘えなくなっってしまった。

「もちろんアイシヤも一緒に入って
私の体を隅々まで
綺麗にしてくださいますよね?。」

「え〜自分で洗えよ〜。」

「いいじゃないですか。
ほう、私はアイシヤのものなんでしょ?。」

「…聞こえてたのかよ…。」

アイシヤは目をそらしながらボソツと呟く
カルミアをモノ扱いしたマーゴに腹が立って
つい回を突いて出た言葉だった、
当然カルミアは聞き逃していなかった。

「洗ってくださいよね？、ね？。」

「あーレン？、こつちはカルミア助けたよ、
うん元気元気！、こつちは？うんうん、
じゃあ後は手筈通りでー！！。」

会話を無理矢理中断させレントに連絡を取るアイシヤ、
頬を赤くしている所が可愛いなあと考えたカルミアだが
はたと、ここは敵地である事を思い出す。

「ここには2人でいらしたんですか？。」

「いや、あたし達とカルミアの生徒達で来たよ。」

カルミアはアイシヤと違い弟子を取らず、2年という期間で10人程の生徒に技術を教えるという形式を取っている。その生徒達がアイシヤに同行してきたという。

「もしかして、アイシヤにご迷惑をお掛けしました？」

「いいや、3時間前にカルミアの反応を確認して直ぐに出かけようとしたら待ち構えられてね、どうしても一緒に行きたいってさ。」

「それは、ご迷惑をお掛けしてますよね…。」

「かけてないよ、皆自分の仕事を弁えてて冷静だし、人手がなけりゃこうやってあたしだけ突っ込んでこれなかったしね。優秀な子達だよ。」

「…んふふ、ありがとうございます。」

カルミアはしょうがないなあと苦笑を浮かべるが、自分の生徒をアイシヤに褒められて内心凄く嬉しい事が表情に出てしまっていた。

「じゃああたし達は撤収するよ。」

「皆はどうするんですか？」

「撤退戦を仕掛けてもらってる。」

撤退戦とはマーゴハンターのラース攻略の戦法の二つで救出作戦とセットで行われる事が多い。簡単に言えばマーゴに勝利の味を覚えさせ自信を持たせる事でその場所から逃げ出す事を防ぎ、後日十分な戦力を用意してラースを潰すというものである。

「成程、レンちゃん撤退戦得意ですね。」

「あいつ撤退戦の時、本当性格悪いよね。」

レントはこの撤退戦が得意で相手を上げて壁とす手回が巧妙で2人をよく驚かせているのだ。

（先輩、悪口は本人に聞こえない所でやってくださいーい！。おっとー！）

「ほめたんだよ。ほら油断するなよ。」

通信をONにしたままのアイシャの耳にレントから苦情の声が送られ、いつものやり取りになる。

「よっと」

そんな感じで通信を終えたアイシヤは、取り出した毛布でカルミアを包んだ後、お姫様だったこの体制で抱き上げる。

「はあ、いいですね、夢のようです。」

「今回だけだぞ。」

アイシヤの胸に抱かれる感触にうっとりとするカルミア、今回だけとは言っているがこれまで何度もこうされているカルミアとしてはそう言っているツンデレアイシヤも魅力的だ。

惜しむらくは救難信号は出せたが未だに体の機能の殆どが回復しておらず、左目の撮影機能が使えないことだ。

アイシヤの腰に装備されたアニマウェポン
メデューザから
赤色に輝く羽が展開する。

モード アクイラ

メデューザの高速飛行モードで
その速度は最大で音速に届く。

小回りが効かず、航続距離に比例して
相応のエネルギーを消費するなどの欠点もあるが、

短い距離ならば
アイシヤのエネルギー量ならば影響が無いので
アイシヤはこの速度を攻撃に組み込むことで破壊力
を上げる事に成功し上手く使いこなしている。

先程のスカレットブレイザーもこのアクイラ
の速度で攻撃力を上げている。

「いくよっー!」

アクイラに十分エネルギーが溜まり
開けた大穴に向かい助走をつけ
飛び立つアイシヤ。

その後のレントの撤退戦も順調に事が運び、
カルミアの救出作戦は成功したのだった。

その後、
件のレースは
アイシヤ、カルミア、レント、

カルミアの生徒に加え、

アイシヤの呼びかけに応じた、

クラス5が2人

クラス4が2人

という中規模になっただけのレースに対して
過剰ともいえる
戦力の前に壊滅したという――。